

## 第七章：君子の知徳と処世法

### 【知 知ることについて】

「論語」に顕われる仁・義・礼・信・智の「五徳」を研究して、いよいよ最後の智に辿り着きました。智は知の別体でもともと同じ意味です。「孟子」は「是非の心は智の端」「智恵ありと雖も云々」と言って、「智」を主として使用しますが、「論語」では専ら「知」「知者」「知る」という用い方がされています。頭のはたらきを表し、ものごとを知り、わきまえ、認め、是非を弁別する能力（識別・見分ける力）などの総称をいいます。

「中庸」に「学を好むは知に近く、力行は仁に近く、恥じを知るは勇に近し」とあるように、知は学（学問、学習）に関連する知覚の徳です。そういう意味からいって、知徳は先の四徳に比べて文明的というか処世的というか、古代社会で人々が純朴かつ集落そのものが家族同然だった「大同の世」には不要なもので、人間が個に目覚め狡知・私欲の発達しだした「小康の世」以降に必要化された徳だといってよいと思います。「色々役に立つことを知って身につけ、自己及び社会に役立てる徳」と定義してみます。

では何を知ることが知とされたのか。「論語」に記載されている内容を大雑把に分類してみると、第一に「詩経」「書経」等の古典を知ること、第二に諸徳すなわち孝、弟、仁、礼、楽などを知ること、第三に人を知ること、第四に処世法を知ること、そして第五は命<sup>めい</sup>を知ること大別できます。分類の順を追って話を進めることにしましょう。

### 【「詩経」「書経」等の古典を知る】

先生が普段常に重要視されたのは「詩経」「書経」そして礼を行うことであった。（述而第七の十七）

「詩経」が古代歌謡集で、「詩三百、一言以てこれを蔽<sup>おほ</sup>う、曰わく思い邪<sup>よこしま</sup>なし」（為政篇）として孔子が学園のテキストとして最も尊重したことについてはすでに述べた通りです。子夏や曾子や南容といった弟子たちが、「詩経」の章句を拳拳服膺し、それを孔子との対話に引用している場面が「論語」に散見されるだけでなく、孔子の息子の伯魚が、自宅の庭で孔子の前を小走りして過ぎようとする、「詩を学んだか」と問われ、「未だです」と答えると「詩を学ばなければ立派にものがいえないよ」と諭されたものと、孔子の門人に語った記事が載っています。（季子篇）

詩が外交上の応対辞令に常用されたこともすでに述べたことで、事例が「春秋左氏伝」にしばしば見られます。例えば、春秋の五覇の一人である晋の文公（重耳）は、即位する前、長い雌伏の時代があって、驪姫<sup>りき</sup>の姦計<sup>かんけい</sup>にあって出奔して以来、諸国を流浪しました。

狄、衛、齊、宋、楚等を経て秦に着いた重耳を秦の穆公は礼遇しました。歓迎の宴で、「重耳は『河水』を賦し、穆公は『六月』を賦した」とあります。「河水の詩」は逸詩で現在の「詩経」にはありませんが、自分が故郷に帰れたら返礼として秦に参朝しようの暗喩を謡い、「六月の詩」は「詩経・小雅」の一篇で、重耳のために援軍を出そうとの意を、穆公が詩で返したものです。詩はこのような君子たる者の外交上の必須教養でありました。

「書経」はすでに述べたように、「虞書」「夏書」「商書」「周書」からなる唐虞時代、夏王朝、殷王朝、周王朝の聖天子たちの記録を編纂した、いわば政治倫理集といった書物です。堯・舜・禹・湯・武王等の聖天子はじめ周公や伊尹等名臣の言葉も載っており、「帝王学」の最も古い基本文献であると同時に、彼らの目指す政治や政治に望む姿勢が窺える、格好の政治学テキストでもありました。

「論語」には、子張の問に答えて殷王朝中興の英主であった武王の三年の喪について孔子が説明したり、ある人が孔子にあなたの政治論は聞くがなぜ実際の活動をししないのか、という問に、「『書経』に『お前は孝行者だ、又、兄弟とも睦まじい。その道は一国の政治にも移し得る』とある。親に孝、兄弟に友ということは、それを広く及ぼせばまさに政治をするのと同じだ。何もわざわざ政治家になって政をする必要はないのだ」と、「書経」を引用して応答している場面が為政篇に載っています。

「詩経」「書経」は「詩書」と併せて呼ばれ、君主はもとより官吏を目指す君子の必須教養として尊ばれました。弟子たちはそれを暗誦し、賦し、詩句の解釈や歴史上の逸話を語り合ったに違いありません。血気盛んな若者たちばかりの孔子学園は時世を論じ政治の荒廃を憤り、さながら松下村塾や緒方洪庵の適塾さながらの熱気に包まれていたことでしょう。やがて彼らは魯、衛、齊の有能な官吏として活躍の場を得ていったのです。

余談を付け加えるなら、「史記」・陸賈伝によれば、漢の高祖・劉邦が皇帝となった当初、陸賈に帝王学の進講を受けたときのテキストも「書経」と「詩経」でした。もっとも、勉強嫌いの劉邦は一、二回の講義で根をあげ、「わしは馬上で天下を取った、今更そんなものを読んでも始まらん」と言い逃れようとしたましたが、陸賈に「文武並び用いるのが長久の術です」と諫められ、「慚ばざるも慙ずる色あり」と、しぶしぶ学んだようです。

## 【諸徳を知る】

次に「諸徳を知ってわきまえる」ことが知る必要のある重要事でした。これについては孔子は嘆きっぱなしです。「先生が言われるには、子路よ、徳を知る者は鮮し、と」(衛霊公篇)。ここで孔子が嘆く徳とは、「中庸」にある「庸徳を行い、庸言を謹む」という程度の意味で、すなわち「常識としての徳や言葉を普段行い、気を配る」ことができていないと言っているのです。人たれば次の如くあれ。

子夏曰く、賢を賢として色に易え、父母に事えて能く其の力を竭し、君に事えて能く其

の身を致し、朋友と交わるに言いて信あらば、未だ学ばずと曰うと雖も、吾は必ずこれを学びたりと謂わん。(学而第一の七)

(孔子学園が学ぶ目的として基本においたことは次の通りで、弟子の子夏が語った。第一は賢者を賢者として表情態度を引き締めて尊ぶこと、第二は父母に精一杯の敬愛を尽くすこと、第三は主君に忠信を以て仕えること、第四は朋友との交際に言ったことに対する信を欠かないこと。これだけのことができれば、殊更「学問」を勉強しなくても、既に人の道を学んだといつてよい、と)

卑近なことではあるが、なかなかどうしてできることはありません。「孟子」も「道は邇(近)きに在り、而るにこれを遠きに求む。事は易きに在り、而るにこれを難きに求む」と言って無闇に高遠な道を求める愚を諭しています。そして卑近な孝・弟・忠・信といった基本諸徳がキチンと出来た上で、君子ならば礼を弁(わ)かまえることが欠かせない。「礼を知ること」が君子者の必要条件でした。

先生が言われるには、臧文仲は、陪臣如きで蔡(国君以上のものが所蔵する龜卜の道具)を置いている。又、家の建築の柱の梁受けを山型にし、梁の上の短い柱に藻を描いた。これは皆な礼に外れた行為だ。どうして彼が知であるといえよう、と。(公治長第五の十八)

臧文仲は、当時の孔子より百年以上も前の魯の国家老であった人物のことです。「春秋左氏伝」に、魯の大夫であった穆叔が晉の執政・范宣子に、「不朽」とはどういうことだろうと問われ、「我が国(魯)にかつて臧文仲という大夫があり、既に没しましたがその言葉は世に残っています。私はこう聞いています。人がことを為すに最上なのは徳を立てること、その次は功を立てること、その次は言葉を立てることで、この三つは時代を経ても廃らない。これを不朽というのである、と」(襄公二十四年)と答えた記事が載っています。これによれば臧文仲は立派な言葉を後世に残した人物のようです。

そして又、子路が成人とは何かを訊ねた時、「子曰わく、臧文仲の知、公綽の不欲、卞莊子の勇、冉有の芸があって、これに礼楽が備われば成人だといつてよい(憲問篇)と、孔子自身が臧文仲を「知者」であると認めています。その臧文仲をなぜ先に掲げた「公治長篇」では「彼が知といえようか」と言っているのでしょうか。

実は衛霊公篇でも「子曰わく、臧文仲はそれ位を竊める者か。柳下惠の賢を知りて与に立たず。」と、臧文仲の人間的小狭さを非難しています。孔子にとって臧文仲は、頭がよくて立派な言葉を残し仕事もできた人だが、同列のライバルであった柳下惠のような賢人を退けたり、諸侯以上に適用される礼式を陪臣の身で行う僭上家で礼楽の備わっていない人物だとして、「どうして彼が知であるといえよう」と言ったのでしょう。管仲に対し、桓公を補佐して諸侯の覇者とした仁者だとしながらも、「三歸」「反玷」の件で、「管仲にして礼を知っているとしたら、礼をわかまぬものなど誰もおるまい」(八佾篇)と手厳しかった

のと同じ論法です。

すなわち、「先生が言われるには、人民を統治するには知はあっても、仁でこれを守ることができなければ、これを得ると雖も必ずこれを失う」(衛霊公篇)とあるように、知徳にも「知の条件」があり、仁や礼等と併せ持つことによりはじめて「知である」とされたのは、他の四徳がそうであるのと同様なのです。孔子から満点を貰うのは並大抵でありません。

### 【人を知る】

次に知者たる者は人を知らねばならない。ある時、弟子の樊遲<sup>はんち</sup>が知とは何かを孔子に訊ねると、「子曰わく、人を知る」(顔淵篇)と答えました。「知」は「詩書」などの古典に精通し、庸徳・庸言を行い、孝・弟・仁・礼・楽等の諸徳を知る以外に、人物を知ることにも重点がおかれしました。「論語」の篇々に頻出する月旦評はそれを示しています。孔子の教育法は、古今の人物を俎上に挙げて議論することを以て事例研究の好材にしていた様子が「論語」を読んで気の付く点です。弟子たちも勢いその癖が習いとなっていたようで、子貢がある時人物比較論を盛んにやっていると、孔子に「子貢は賢いんだね。まあ私にはそんな暇はないよ」(憲問篇)とクギをさされている愉快的場面も載っています。このように「知」とは諸徳を知ることであり、人を知ることでした。

古代聖天子や名臣たち、春秋の五覇である桓公・文公そして管仲、晏子、子産、孔文子など過去の偉人が語られ、季氏をはじめとする三桓、当時の卿大夫であった佞者・祝鮀<sup>しゅくだ</sup>、美貌で南子の情人となった宋朝<sup>そうちよう</sup>、敗走の殿役<sup>しんがひやく</sup>をやった武人・孟之反<sup>もうしはん</sup>、権力家の孟公綽<sup>もうこうしゃく</sup>、賢人の蘧伯玉や柳下惠、隣人に酢を借りて上辺を繕う微生高、はては弟子の末席にいる子夏と子張のこと等々、あらゆる人々が俎上に上げられ討論が交わされました。

南宋の大儒者である朱熹(朱子)は、「人を知る」ということについて、「人を知られれば、即ち是非邪正、或は弁ずる(見分ける)能わず」(「論語集注」といい、伊藤仁斎は「人を知る」とは人間の偉大さを知ることと解し、斉の賢人宰相・晏子でさえ孔子の偉大さを理解できなかったくらいだから、人を知るといことがいかに難しいことか、と述べています。(「論語古義」)

いずれにせよ、「人を知る」ことは、「我れ三人行えば必ず我が師を得」(述而篇)で、善人・善所は見習い、不善人・悪所は改める「他山の石」になり、更にはよりよき処世法を知り、人間や自然を支配する命(運命)を知ることによって発展していきます。我が国にも「人の振りみて我が振り直す」という諺がありますが、それを教育上のカリキュラムに組んだ孔子学園の教育法は、現代改めて取り入れるべく検討する価値があると思います。

### 【処世法を知る】

処世法については多少紙幅を割いてみます。先ず弟子たちにとっての「知る」「知られる」は、「認められる」の同意語でした。孔子学園は、詩書や宮廷の礼楽・官制を学び、広い意味でのビジネスマナーを習得して諸侯に仕える役人となって、世の役に立つ君子になるのが目的の塾です。したがって、若い学徒の中には、学問の研究よりも、寧ろ出世するための手段として入園している者もあって不思議はありません。他人から認められたい、早く認められて世にでたい。弟子たちのそんな焦りに対して孔子の言った同類の言葉が「論語」に五章も記載されています。「子曰わく」を除外して掲げます。

**人知らずして慍<sup>うれ</sup>みず、亦た君子ならずや。(学而第一の一)**

**人の己を知らざるを慍<sup>うれ</sup>えず、人を知らざるを患<sup>うれ</sup>うるなり。(学而第一の十六)**

**位なきことを慍<sup>うれ</sup>えず、立つ所以を患<sup>うれ</sup>う。己を知ることなきを慍<sup>うれ</sup>えず、知らるべきを為すを求むるなり。(里仁第四の十四)**

**君子は能なきことを病<sup>うれ</sup>う。人の己を知らざることを病<sup>うれ</sup>えず。(衛霊公第十五の十九)**

**人の己を知らざるを慍<sup>うれ</sup>えず、己の能なきを患<sup>うれ</sup>う。(憲問第十四の三十二)**

ここで孔子は、 から で、先ず他人に知られたい、認められたいと思う以前に、自分の力量不足をこそ悩むべきだと彼らを叱咤しています。そして「学而篇」の では、寧ろ他人を知らないことを気にかけよといい、 では、「人に知られる」「知られない」、そんなことを悩むより、学問を楽しんだり自分を磨くことに専念するのが君子というものだと言っています。

そして「子曰わく、三年学びて穀に至らざるは、得やすからざるのみ。(先生が言われるには、三年も学んで仕官を望まないという人物はなかなかいないものだ、と)」「(泰伯篇)」とあって慨嘆しました。大儒・大吏を目指すなら目標を大きく掲げ、「道端で聴いた話を途中で話す」(陽貨篇) いわゆる道聴塗説<sup>どうちようとせつ</sup>の輩になるな。本格醸造酒のようにじっくり学問して醸成させよ。「子曰わく、苗にして秀でざる者あり。秀でて実らざる者あり」(子罕篇) 速成を願うなかれ、例えば山を造り、地を平らにするとくもっこ、もっここと積み重ねていく「継続は力なり」を実践し続けなければいけない。大志を抱く若者は学問にしろ仕事にしろ成果のあらわれることを急ぐべからず。それが結局は処世の妙法だ、と言いたかったのだと思います。

子夏が莒父の長官となって、政治について訊ねた。子曰わく、「速かならんと欲することなかれ。小利を見ることなかれ。速かならんと欲すれば則ち達せず。小利を見れば則ち大事ならず」と。(子路第十三の十七)

又、「知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」(郷党篇)という言葉が「論語」に再三登場します。君子が学問研鑽して「知者」たらんとするのは、色々なことを知って、

どんな有事にも惑わず、慌てないで臨機応変に対処できるため。「君子固<sup>ちと</sup>より窮す。小人窮すればここに<sup>みだ</sup>濫れる」(衛霊公篇)。君子だって人間である以上、当然困窮するものだ、君子が小人と異なるのは、そんな時にも濫れないことだ。「松や柏<sup>ひのき</sup>を見てごらん。気候が寒くなり、他の落葉樹が散って後に<sup>しほ</sup>彫む。厳しい時節にはじめて屹然と立っているその存在に気が付く。人も危難の時にはじめて真価がわかるものだ」(子罕篇)。この「後彫<sup>こうちよう</sup>の志」を以て学問に専心しなさいと、孔子は君子人たる気宇節操を涵養するためにも知の涵養を重要視していたのです。

孔子は束脩<sup>そくしゅう</sup>と称する、はじめて入門する際の手土産である乾肉一束さえ持参すれば、礼に適った行為だとして入門させ、又、どんな身分の低い者でも、教えを請う者があれば、ありったけの力を尽して教えました。ただ、学習者が「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」(述而篇)、すなわち憤<sup>ふん</sup>悱<sup>ひ</sup>しない者には啓発せず、「どうしよう、どうしようと必死に悩まぬ者は、私はどうしようもない」(衛霊公篇)と言って、自ら自主的に学びたいと切望する者のみを循循と教えました。

さてこの辺で一旦話題を転じ、孔子の弟子たちを何名か紹介しておきましょう。「史記」(孔子世家)に「孔子の弟子の数はおよそ三千人に達したといわれ、一人で六芸の総てに通じていたものが七十二人いた」と書かれています。そして「仲尼弟子列伝」という一篇が組まれて主だった弟子の伝記が綴られ、魏の王肅の著作とされる「孔子家語」は内容の信憑性について云々されますが、それを補足して弟子たちの行状を語ってくれています。

「孔門の十哲」の中で孔子が最も愛しその将来を期待したのが顔淵で、人間的な欠陥を人一倍もっていながら叱り愛されたのが子路、孔子一行の経済的バックを支えたのは投機の名人子貢、エリート官僚で気宇が不足して叱られた冉有、そして理屈勝ちのため叱られ通しの宰我、文学を以て孔子の思想を後代に伝えた子夏や子游。その他多士済々な弟子の中から、子路、顔淵、子貢、宰我を取り上げてみることにします。

## 【子路】

孔門の一番年長組が子路で孔子より九歳年少です。中島敦の「弟子」の主人公が子路です。粗野で武勇を好み、身なりなどは一向に構わぬ直情型人間でした。かつて雄鶏の羽で作った冠を着け、牝豚の皮で作った帯を締め、賢者の噂の高い孔子をへこましてやろうと意気揚々とでかけたものの、孔子の仁徳に魅せられてミイラ取りがミイラになってしまった人物です。

俠客的な律儀さを以て孔子に師事しました。ある教えを聞いてそれが実行できないうちは、次の教えを聞くことをひたすら恐れる健<sup>はなげ</sup>気なところもありましたが、孔子が政治をやりたくて陽虎や公山不狃<sup>こうざんふじゅう</sup>等の悪党や淫乱な靈公夫人の南子に誘われた時、孔子に突っかってそれを阻止したのは子路の功績です。ある時孔子が行舎用臧<sup>こうしゃようぞう</sup>(用いられれば行い、捨てられたら引きこもる時宜を得た振る舞い)ができるのは、自分と顔淵だ、と言ったので

子路がやっかんで、「先生が大軍を率いるときは誰と一緒にやられますか」と訊くと、孔子曰わく、「私は暴虎馮河（素手で虎に立ち向かい、河を歩いて渡るような無鉄砲）な男とは一緒にできないね。事に当っては慎重、計画をキチンと立ててやる人間と組みたいものだ」（述而篇）とバッサリやられています。

そうは言っても子路の獄吏としての的確な断罪能力には驚嘆し、「**幣<sup>やぶ</sup>れた綿入れの上着を着ながら、狐や貉の毛皮を着た人と一緒に並んでも恥ずかしがらないのは子路だね**」（先進篇）とその素朴さを褒め、孔子が彼の琴の腕前をけなして後輩たちが子路を尊敬しなくなった時、「**子路は堂の上には上がったが、まだ部屋に入らないだけで腕前は相当なものだ**」（先進篇）とかばったりしています。孔子は人間的には一番子路が好きだったような気がします。その子路に「知るということ」について孔子はこう教えました。

子曰わく、**由<sup>ゆう</sup>（子路）よ、女<sup>なんじ</sup>（汝）にこれを知ることを誨<sup>ぬ</sup>（教）えんか。これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。これ知れるなり。**（為政第二の十七）

「知る」とは、自分が何を知っていて、何を知らないかをはっきり知っていることだ、と。知らないことは決して恥ずかしいことではない。知っている者に素直に聞き質したり、書物を研究すればいいのだ。「知る」ということは、先ず知るべき対象が明確であり、その対象に対して現在知っていることと、未だ知っていないことを弁別できていることである。知ったかぶりしては、真実を把握できないし、少しも知が深まらず、自分を磨くことに繋がらない。又、慧眼の士至れば、いずれ化けの皮が剥れ、お里が知れて、自分の存在価値すら失ってしまう、と。又、政治論の章で引用した次の話も「知」に関する孔子の立場をよく表しています。

子路が「衛国の君主が先生に政治を任せるとしたら、何を真っ先にやられますか」と訊いた。孔子は「先ずは名を正すことだ」と答えた。「まあ、これだものうちの先生は。一寸まわり遠いのと違いますか。この急場に」と子路が応えるや、孔子曰く、「**野<sup>や</sup>なるかな、由や、君子は其の知らざる所に於いては、蓋<sup>かつ</sup>闕<sup>けつ</sup>如<sup>じょ</sup>たり（お前はがさつ者だ、君子は知らないことには黙っているものだ）**」、そういつて叱られた。（子路第十三の三）

孔子は知ったかぶりや口達者を極端に嫌いました。自分の頭で深く反芻し熟考もせず発言する者や、聞きかじりの誰かの意見を、さも自分の考えの如く滔滔と説く道聴塗説の輩を排撃しました。そして真実に忠実な者を賞賛しました。「**私の若い頃は、歴史の記録官が慎重で、疑わしいことは書かずにその箇所を空欄にしておいたものだ**」（衛霊公篇）と述べています。余談になりますが、昔の「歴史の記録官」が事実を遵守せんとする律儀さは死を賭すほどで、「春秋左氏伝」にも有名な逸話が載っています。

<（齊では春秋の覇者・桓公が死ぬと、公子たちの間で相統争いが起こり、実権が卿大夫の手に移っていった。時の齊公であった莊公が大夫の崔杼の妻と密通し崔杼は遂に莊公を弑した）この事件を歴史官が「崔杼、其の君を弑す」と記録した。崔杼は怒って記録官を殺した。するとその弟たちがあとを継いで同じように書いた。犠牲者は併せて三人になった。そして三番目の弟が又同じように書いた。崔杼は仕方なく許した。齊の他の史官は歴史官が皆な死んだと聞き、記録する竹の札を手に駆けつけたが、既に記録が済んだときいて引き返した>（襄公二十五年）

孔子の晩年、「勇に過ぎた子路は普通の死に方はできまい」（先進篇）と予言したのが的中して、子路は衛の内乱に巻き込まれ、主君を救うべく敵陣に殴りこみ、勇敢に闘いましたが、全身なます膽のごとくに切り刻まれて惨殺されました。その屍が塩漬けされたと聞いた孔子は、家中の塩漬けを悉く捨てさせ、以後一切それを口にしなかったということです。

#### 【顔淵（顔回）】

子曰く、吾れ回と言うこと終日、違わざること愚なるが如し。退きて其の私を省れば、以て発するに足れり。回や愚ならず。（為政第二の九）

回とは弟子の顔回（顔淵）。孔子より三十七歳年下の魯国の後輩で、「回や予（孔子）を見ること猶父の如くす」（先進篇）と衷心より孔子を敬仰し傾倒して学びました。孔子も彼を称賛敬慕しましたが、史記（仲尼弟子列伝）に「蚤く死す」とあるように四十一歳（又は三十二歳説もある）で亡くなったとされます。「一を聞いて以て十を知る」（公冶長篇）夭折の天才でした。又、他の門人がすぐにも失ってしまう仁徳を長期間離さず守り持つことのできた知・仁兼ね併せた徳者だったようです。

「孔門十哲」の中でも、徳行第一に挙げられていた顔回は、おそらく孔子が自己の後継者と目していたに相違なく、顔回と同年齢の子貢でさえ、彼を「それ能く夙に興き夜に寝ね、諷誦して礼を崇び、行、過ちを貲せず」（「孔子家語」・弟子行篇）と評し、一目置くほどの間然する所無き立派な人物だったようです。勇氣はあるが暴虎馮河の子路や、自信家で卒のない子貢や、言語に長じて問難（問い詰める）する宰我に比べて顔回は、寡黙・謙讓の貧窮居士でしたが、彼ほど学を好む者はいませんでした。魯の哀公が孔子門下では誰が一番勉強家か、と訪ねた時、すかさず孔子は「顔回なる者あり、学を好む。怒りを遷さず、過ちを式（再）たびせず」（雍也篇）と答えています。

標題に掲げた為政篇の文章は、その顔回が、師の孔子と終日話している時には、お説を聞いて頷いているだけで、ばかみたいに見える、というのです。「違わざること」を朱熹「論語集注」では、「相背かず。よく聴いて受け入れるだけで問難することがなかった」すなわち「逆らわない」と解釈しています。先進第篇にも「子曰わく、回や我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於いて説ばざる所なし」とあります。循々と説く師の説をひたすら喜ん



で聞き取り、総てをマスターしようと務めていたのです。

そのほかみたいに見える顔回が、私的生活における「日用動静語黙の間」(朱熹注)を観察すると、人をはっとさせるものがある。回は決して愚ではない、と孔子は言ったのです。孔子はこの場面で、出世を追わず、隠者的風韻を漂わせる勤勉努力家顔回の底知れぬ実力を賛美し、出世にはやる同門の弟子たちの範としたのだと思います。

最愛の弟子顔回を失ったとき、孔子はその死を悼んで慟哭して天を怨みました。「<sup>ああ</sup>噫、天、<sup>われ</sup>予を喪せり。天、予を喪せり」と二度繰り返し絶叫し、お伴の者が普段の孔子らしからぬ悲嘆ぶりに驚き「先生でも<sup>どうこく</sup>慟哭されるのですか」というと、「かの人のために慟するに非ずして、誰が為にかせん」と応えました。(以上先進篇)

### 【子貢】

狭い路地裏に住み、粗末な食事と水だけで暮らしていた顔回にくらべ、投機の名人であった子貢は金持ちでした。「先生が言われるには、顔回はまあ理想に近いね。富を求めず修養に励んでいるからよく窮乏する。子貢は命ぜられなくても金儲けが上手で、彼の予測は大抵的中する、と」。(先進篇)

子貢は孔子より三十一歳年少で、「史記」の「貨殖列伝」では、子貢が宋と魯の間で問屋業をやっていたと記述されています。「仲尼列伝」には、子貢は商品を蓄えておき、時機を見てそれをあちこちに運んで利を得た、とあり、両国の情報を利用して物価の相場を巧みに読んで金儲けしていたのでしょう。礼の徳の項で述べた、告朔の礼に用いる生贄の羊をやめようとしたり、<sup>ちゅう</sup>邾の君主と魯の定公の将来を予言して的中させたことなども併せて憶測すると、子貢は現実的かつ右脳型で勘のよい人物だったようです。

「孔門の十哲」では「言語には宰我・子貢」と、言辞に優れる高弟として分類されています。言辞と現実的裁量を買われて、四方の外交役にしばしば登用され、魯や衛の宰相となったこともあります。弟子の中では子路に次いで登場回数の多い門人です。

孔子「子貢よ、お前は私のことを多く学んでこれを覚えている物知りだと思うか」

子貢「そうだと思いますが、違いますか」

孔子「違うよ。私は一つのことでは買っている」(衛霊公第十五の三)

子貢「土地の者が皆な褒めるという人間はいかがでしょう」

孔子「十分じゃない」

子貢「土地の者が皆な憎むという人間はいかがでしょう」

孔子「十分じゃない。その土地の善人が褒め、悪人が憎むというのには及ばない」

(子路第十三の二十四)

子貢は、孔子にしきりに質問して聞き学んだ所謂「耳学問の人」です。過去の歴史上の

人物の評価や門弟同士の優劣を孔子に問い、或は門人をつかまえては滔滔と弁じて孔子に叱られたりしています。右の場面では、多くのことを雑然と知ることより一貫性の重要さ、多くの人に褒められたり憎まれたりする多数決の原理より、真の善人や悪人による評価の重要性を孔子は子貢に教えています。知るということは、多寡の問題ではなく、真贋を見分け一貫した自分の立脚点を築くことだと、孔子は言っているように思えます。さて他人の評価好きな子貢が自分の評価を孔子に訪ねました。

子貢「この私などはいかがでしょうか」

孔子「お前は器物だ」

子貢「何の器ですか」

孔子「瑚璉<sup>これん</sup>だ（宗廟の供え物を盛る重要な器だ）」（公治長第五の四）

子貢が褒められているようですが、最上級に褒められているわけではありません。別章に「子曰わく、君子は器ならず」（為政篇）とか「（子曰わく、君子は）人を使うに及びては、これを器にす」（子路篇）とあるように、君子の器量というものは本来その働きは限定されず、T・P・O（時・所・状況）に合わせて広く自由に適応できる柔軟性をもったものでなければならない。「礼記」（学記）でいう「優れた教師は、叩かれる鐘のようで、小さく叩けば小さく鳴り、大きく叩けば大きく鳴る」鐘のようでなくてはいけない。寧ろ他人をそれぞれの適性にそって器として働かせるのが君子なのだ、孔子はそう言っているのです。

子貢は理財の才に富み、言辞に優れ、「一を聞いて二を知る」（公治長篇）英才ではあったが、魯の大夫や門人から孔子より優れているのではないかと言われたりする、外目には自信家で人の好悪が激しかった人のようです。孔子は「器」を喩えに一言で子貢の長所と欠点を指摘してみせたのです。

尚、「史記」（仲尼列伝）は、子貢は「財産は千金を重ねるほどで、最後は斉で死んだ」と結んでいます。死ぬまで蓄財に熱心な子貢でしたが、そのおかげで孔子財団を支え、孔子没後一人墓を守って三年の喪に服した後ようやく去ったのも子貢でした。

#### 【宰我（宰予）】

「史記」（仲尼弟子列伝）は、「宰<sup>さい</sup>予、字は子我。利口辨辞なり」で宰我伝を切り出しています。「論語」でも先述したとおり「言語には宰我・子貢」とあり、弁舌に長けていたことは間違いありません。又、「論語」に登場する弟子の中では異質なタイプで、一風変わった発想をする興味深い人物です。

宰我「仁者に井戸の中に人が落ちていたら、やはりそこにいきますか」

孔子「そんな馬鹿なことはしない。その知らせを受けた君子は、井戸の所までは行くだ

ろうが、井戸の中まで落とし込むことはできない。思慮ある手を打つだろう。君子は一旦は欺くことはできても騙し切ることはできない」(雍也第六の二十六)

何とくだらぬ質問をしたのだろう、と思う人が多いはずです。仁者だからといって、井戸に飛び込んですぐ助けようなどと早合点するはずがないことは、宰我が知らぬはずはない。なのに何故こんな質問をしたのだろうか、と。

宰我は又、魯の哀公に樹木を御神体とする土地神の社<sup>やしろ</sup>のことを聞かれ、「夏人は松の木を使い、殷人は柏を使い、周人は栗の木を使いました。周人が栗を使ったのは、栗イコール戦慄につながり、悪いやつは死刑で処罰させるぞ、と民衆を戦慄させるためなのです」と答えました。それを聞いた孔子は、「何と馬鹿な説明をしたのだ。君主に殺伐を教えるだけじゃないか。でも、できてしまったこと、やってしまったことは仕方ない。過去のことは咎めだてはしまい。今後は注意すること」といって叱りました。(八佾篇)

宰我は「利口辨辞」な人物です。齊の大夫にもなったほどの男です。過去のいわれにも詳しくそうです。宰我の年齢は文献上では不明ですが、少なくとも顔淵や子貢くらいで、孔子と三十歳前後の年齢差はあったと思われます。だとすると、子貢が告朔の礼に用いる生贄の羊をやめようとした合理精神と孔子が相容れなかったように、宰我にとって孔子の思想は余りに復古主義に偏り、時代の変化にそぐわなくなっていることへの反発が働いていたのではないかと、そんな気がします。先の例では、孔子が仁だ、仁だとあまりに仁ばかり説くので反発、そして孝だ、三年の喪だと非現実的なことをいうので反発。それを暗示させるのが次の章です。

宰我が、子が父母の死後三年間(実質二十七ヶ月)、親の喪に服す決まりがあったのに反発して、「そんなに長い期間喪に服していたら、礼・楽そのものが行われず消滅してしまいます。一年でいいのではないのでしょうか」と孔子に訊いた。そうしたら、孔子はキツなって叱った。孔子「お前は親が死んで、僅かに一年経っただけで、米の飯を食い、美服を着て平気なのか」。宰我「別に平気ですけど」、孔子「お前が平気だったらそうするがよい。君子たるもの喪に服している間は、何を食ったってうまくないし、どんな楽を聞いても楽しくないもんだ」。そう言われて宰我が退出すると、孔子は嘆かわしい顔をしてこう言った。「子供は生まれてから三年経ってやっと父母の懷から離れる。三年も子を心配してくれたその父母への思いが『三年の喪』というしきたりになったのに。宰我には、父母への三年の愛すらないのか、冷たいやつだ」と。(陽貨第十七の二十一)

この章は色々考えさせられる問題を含んでいます。伊藤仁斎は「論語古義」で、宰我がこの時点では未だ父母存命中だからそんなことをいっているのだ、といい、荻生徂徠は「論語徴」で、孔子が礼楽を重んじたのでその点は宰私の指摘はもっともだ、といい、朱子の「論語集注」は宰我を責める説を集め等々、古来宰私の心情の是非・弁護さまざまです。私

は宰我の肩を持つ方ですが、「父母への三年の愛すらないのか」にはじーんと身に詰まされる思いがします。孝道の実践者として名高い中江藤樹の「翁問答」の一節を孔子擁護の決め札として拙訳を交えて掲げておくに止めます。

<孝徳を明らかにせんと思うには、先ず父母の恩徳を思いみるがよい。胎育の始めより十ヶ月間、母は懷孕の苦しみを受け十病九死の身となり、父は母子安穩なるを憂えて千辛万苦する。臨産の時至れば、母親は身を切り裂く懊悩を受け父は煩熱の苦しみを抱く。幸いに無事生まれてから三年間は、眠らせ、湯浴みさせ、衣装身繕い、哺乳と子の安穩を思わざる時はない。風邪をひいたといつては医者に連れ、天に祈って回復を願う。年頃になればよい先生に就いて勉学させんと努力し、利口であらうがなかりうがそれぞれ家業を立て、富み栄えんことを謀り願う。「父母の慈愛かくの如くの苦勞を積みて子の身を養い育てたれば、人の子の一身毛一筋に至るまで父母の千辛万苦の厚恩ならざるはなし。父母の恩徳は、天よりも高く、海よりも深し。あまり広大無類の恩なる故に本心のくらき凡夫は、報いんことを忘れ、かえって恩ありとも恩なしとも思わざると見えたり>

宰我に話を戻します。ある時、宰我が昼寝をしているのを孔子が見て怒りました。「朽ちた木で彫刻はできない。糞土<sup>ふんど</sup>の垣根は上塗りができない。宰我にはもう言う言葉もない」と。そしてこう付け加えました。「子曰わく、今まで私は人に対してその人の言葉を聞いて行いまで信用した。これからは、人に対してその人の言葉を聞いてさらに行いまで観察することにした。宰我のことでそう改めたのだ」と。」(公治長篇) 実に厳しいお達しですが、それもあってか孔子は我々に「人を見抜く法」に関する処世術を残してくれました。

子曰く、其の以<sup>な</sup>(為)す所を視、其の由(拠)る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人いづくんぞ廋<sup>かく</sup>(隠)さんや、人いづくんぞ廋<sup>かく</sup>(隠)さんや(為政第二の十)

子曰く、君子は言を以て人を挙げず、人を以て言を廃せず。(衛靈公第十五)

子曰く、衆これを惡<sup>にく</sup>むも必ず察し、衆これを好むも必ず察す。(衛靈公第十五)

対象とする相手の日頃のやっていることを見続け、やっていることの動機や経歴を注意して調べ見て、その人の内面的な思想や職場外での行動をしっかり観察すれば、どんな相手だって見えてくる。表面上の言動だけでは人は見抜けない。言っていることとやっていることのギャップが少ないほど信用がおけるわけです。「察する」というのが重要で、「実際に見届ける」くらいの深意がありそうです。

そして宰我のように口達者だからといって抜擢をせず、その人の官位・身分の貴賤に捉われず、意見の良否・適否を以てその人物の抜擢・登用を決める。世間の評判になど惑わされず、自分の目でしっかり確かめてから判断しなさい、と教えてくれています。

さて、「史記」(仲尼列伝)は、宰我伝の結末を、「宰我は齊の臨菑<sup>りんし</sup>の大夫となり、田常の

乱に加わって、一族は皆な殺された。孔子はそのことを恥とした」と、結んでいます。「利口辨辞なり」と司馬遷に評論された宰我の末路は、こうした種類の人たち全般を象徴したような終わりがたをしているように思えます。

七十二人も六芸に達した弟子がいたといわれるその中から僅か四名の伝記を概観したに過ぎませんが、一応弟子列伝をこの辺で打ち止めにして、再度「処世法を知る」に戻ることになります。今までに仁・義・礼・信・知という五倫の一端を述べてきましたが、処世上これから個々の徳を取り締まり統べるのに、孔子が重要視したのが「学」であり「中庸」です。

孔子曰く、「子路よ、汝は『六言六弊』について聞いたことがあるか」。子路対（応）えて曰く、「未だです」。孔子「座りなさい、教えてあげよう」

仁を好みて学を好まざれば、その弊（害）や愚。（ただのお人好し）

知を好みて学を好まざれば、その弊（害）や蕩。（つまらぬことに蕩尽）

信を好みて学を好まざれば、その弊（害）や賊。（盲信して人を害う）

直を好みて学を好まざれば、その弊（害）や絞。（窮屈すぎて首を絞める）

勇を好みて学を好まざれば、その弊（害）や乱。（却って騒動を起こす）

剛を好みて学を好まざれば、その弊（害）や狂。（気違い沙汰の振る舞い）

（陽貨第十七の八）

「<sup>りくげん</sup>六言の<sup>りくへい</sup>六弊」と呼ばれる人口に膾炙した文章です。この場合の「学を好む」とは、「T・P・Oを踏まえた最適の行動を判断する能力を持つ」ということと同義でしょう。ある状況下、どう行動すべきかを判断できなければ、せっかく徳の項目である仁・知・信・直・勇・剛も不徳になってしまう。六徳にも「学」や「中庸」が必要だといっているのです。

例えば、孔子一門の最重要視した「仁」にしても、「仁を好みて学を好まざれば、その弊害は愚」。ただの情だけのお人よしでは、よく知られた「宋襄の仁」の愚を冒してしまいます。

斉の桓公死後、宋の襄公は覇者を目指して楚と対決し、両軍は泓水のほとりで対峙しました。楚軍が渡河を遅れたのを見た宋の宰相が、今がチャンス、敵が河を渡らぬ前に攻撃をしかけるべしと襄公に進言したが、「卑怯な真似はできない」と仁者ぶり、さらに敵が河を渡りきって陣形が整わないのを見て今こそ攻めるべしと再度進言したが、襄公は「陣形ができあがってからだ」と押し止めました。結局宋軍は惨敗、襄公は股に矢傷を負い、これが命取りになって翌年死んでしまいました。これを世に「宋襄の仁」といいます。

又、陽貨篇に、子路が孔子に「君子は勇を尊びますか」と訊いたのに答えて「子曰わく、君子義以て上と為す。君子勇ありて義なければ乱を為す。小人勇ありて義なければ盗を為す」とあるように、勇と義の併有や、「勇を好みて学を好まざれば、その弊（害）や乱」のような勇を統べる学の歯止めが処世上では不可欠です。ここに取り上げた仁・勇に限らず、知・信・直・剛は勿論のこと、総ての徳目についてそれはいえることです。「莊子」は「盗

人にも五分の理」ありとして、皮肉たっぷりに寓喩してみせました。

<大泥棒の盗跖<sup>とうてき</sup>の子分が盗跖に尋ねた。子分「お頭、泥棒にも道德ってのはありやすか」盗跖「どんなことにだって道がないということがあろうか。家のなかの財物をカンで見当をつけるのを「聖」といい、目当ての処に真っ先に踏み込むのを「勇」といい、引き上げるときしがり役を引き受けるのを「義」といい、うまくいくかとか財物の可否を見分けるのを「知」といい、獲物を公平に分けるのを「仁」というのだ。この五つの徳を身に付けずに大泥棒になれたためしはないのだ。子分「・・・・・・」(胠篋篇)>

盗跖の子分への教えはまさに「知に蕩した弊」です。以上のことから推しても、結局「学を好む」すなわち「中庸を得る」ことを「知る」のが、処世上で一番大切なことのようにす。「子曰わく、中庸の徳たるや、それ至れるかな。民鮮なきこと久し」(雍也篇)と、孔子が諸徳を弁証法的に統べる「中庸」を「至れるかな」と最高評価した意義が分かる気がします。処世法の極致は「中庸を得る」ことを知ることだ、といって過言ではありません。そこで以下に「中庸」とは何か、並びに「論語」で語られる「中庸」について、を探ってみることに致します。

「中庸」について論じたのは孔子だけではありません。古代ギリシアの哲学者であるアリストテレス(紀元前三百八十四年～三百二十二年)もその著書「ニコマコス倫理学」で「中庸」の重要性を力説しています。曰わく「倫理的卓越性すなわち徳とは中庸である。(中略)すべてにおいて「中」的な状態が賞賛に値する。だが、われわれは時として超過の方へ、また時としては不足の方向へ傾いていることを要する。かくすることによってわれわれはかえって最もたやすく「中」すなわち「よさ」に適中することになるであろうから」(岩波文庫版)と。

「朱子学」を打ち立てた南宋の朱熹や、その先達である宋の程明道・程伊川兄弟等は、「中庸」を「偏らず倚らず過不及無きこと」としました。どちらかといえば、アリストテレスの捉えの方が、「論語」そして孔子の孫である子思<sup>しし</sup>の著したとされる「中庸」に近い哲理を蔵しているように思えます。

子思は「中庸」の中で、孔子の言葉として「中庸はそれ至れるかな。民能くする鮮なきこと久し」と「論語」(前掲雍也篇)に近いフレーズを掲げ、「君子の中庸は、君子にして時に中す」とか、「天下国家を平治したり、爵禄を辞したり、敵陣に白刃を恐れず命を張って踏み込むことは確かに難事であるが、中庸を貫き通すことはもっと難しい」といっています。「時に中す」がキーワードで、いかなる場合にもT・P・O(時・所・状況)に適中することこそが「中庸を得る」ということの真意です。「論語」から事例を箇条書的に幾つか拾ってみます。

#### 中立周和

子曰く、君子は周して比せず。小人は比して周せず。(為政第二の十四)

子曰く、君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず。(子路第十三の二十三)

この二章は併せて解釈すべきと思われます。即ち、君子は「周して比せず、かつ和して同ぜず」。小人は「比して周せず、かつ同じて和せず」。従って、「君子たる者は誰彼と差別なく付き合うが、自分の立脚点を守り付和雷同はしない。小人は党を作って交わり、定見がないので付和雷同する」。すなわち「君子は和して流れず、中立して倚らず」(「中庸」)の意と同義で、世に処すにはしっかりした自己を持って他人と交際する必要がある、という中立周和の中庸を説いています。

#### 位素行

子曰く、其の位に在らざれば、その政を謀(はか)らず。(泰伯第八の十四)

「中庸」に「君子は其の位に素して行い、その外を願わず」とある意味と同義で、現在自分のいる立場(時処位)に即して全力を注ぐことが一番大切で、他部署や上司のやることを批判ばかりしてはいけなと、言っているのだと思います。他人のやることに対しての欠点はよく見えるものだが、それよりも、お互いが自分の位に素して分を尽くせば、大抵うまく治まっていく。「位に素す」すなわち「素行」の中庸の重要性を説いています。

#### 臨機応変

君子なるかな蘧伯玉。那に道あれば則ち仕え、那に道なければ則ち巻きてこれを懐にすべし。(衛霊公第十五の七)

蘧伯玉は衛の賢大夫。霊公が無道なのを駆逐せんとして孫文子が彼に誘いをかけたが、「君主を犯すことは臣下のやることではない。又、霊公を駆逐したところで今日よりよくなる状況は無い」といって乱を避けて国都を去った。「巻きてこれを懐にする」とは、才能を隠してじっと待つこと。どうしようもない無道の時代や、専横な上司の下にいて意見が無視され、言えば左遷の憂き目を覚悟せねばならぬような時には、暫く控えて時を待つことも止むをえぬ中庸の一法かも。

#### 殺身以成仁

子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。(衛霊公第十五の九)

いざという時は、命を捨てるという過激な行動も中庸の一形態といえます。信義を貫い

たり、他人を救うために身を捨てる勇氣ある行為がそれです。日和見者の反面行為。尋常者にはとうてい出来ない貴い殺身の中庸で、ある時は、偏った行為が寧ろ中庸となるのはアリストテレスのいう「超過のほうに傾く適中」です。孔子も大司空就任後一週間で少正卯を処刑し、夾谷の会盟で身体を張って魯を守った。典型的なのは伯夷・叔齊の如き人物を想像したらいいでしょう。

不憤不啓

子曰く、憤せずんば啓せず。悱せずんば発せず。(述而第七の八)

「馬を水際まで連れていくことはできるが、飲むか飲まぬかは馬次第」という西洋の諺があります。学ぶ側が憤<sup>ふん</sup>悱<sup>ひ</sup>しなければ教えてやらない。憤<sup>ふん</sup>悱<sup>ひ</sup>すなわち、ナニクソ精神で奮励したり、分からないことがあると歯軋りして悔しがらなくては教えても身につかない。やる気のない者には教えない。又、先を学びたい者にはどんどん高等教育を授ける、勉強の嫌いな者にはそれぞれが興味を持つことから教える。これも教育上の中庸です。

勿欺而犯之

子路、君に事えんことを問う。子曰く、欺くこと勿<sup>な</sup>かれ。而してこれを犯せ。(憲問第十四の二十三)

君主に仕えるには欺いてはいけない。しかし、阿<sup>おもね</sup>っていればいいわけではない。君主が間違っていたら、堂々と諫言せよ。「昔者、天子に争臣七人あれば、無道と雖も、天下を失わず。諸侯に争臣五人あれば、無道と雖も、その国を失わず」(孝経) 「欺かず而してこれを犯す」は臣下が主君に仕える中庸です。面従腹背といって、表面では従っている振りをして、内心では反抗しているのが一番陰湿で頂けない。犯す中庸がもっとあっていい。

多聞闕疑

子張、禄を干<sup>く</sup>めんことを学ぶ。子曰く、多く聞きて疑わしきを闕<sup>く</sup>き、慎みて其の余りを言え、則ち尤<sup>と</sup>咎<sup>め</sup>寡<sup>すく</sup>なし。多く見て殆<sup>あ</sup>うきを闕<sup>く</sup>き、慎みて其の余りを行え、則ち悔い寡<sup>すく</sup>なし。言に尤<sup>と</sup>咎<sup>め</sup>寡<sup>すく</sup>なく行に悔寡<sup>すく</sup>なければ、禄はその中にあり。(為政第二の十八)

「多く聞いて疑わしいものを除外して、間違いのないことを慎重に言い、多く見て怪しげなものを除外して慎重に行動すれば、咎めを受けることも、悔いの残ることも少なくやっていける。そうすれば自然と他人に信頼され禄も得られる」と孔子は若い弟子の子張に教えました。信頼と禄を得るための中庸的处世法であるといえます。

又、述而篇では「子曰く、我れ三人行えば必ず我が師を得。その善き者を択びてこれに



従う。その善からざる者にしてこれを改む」とあります。「善き者を択びて学ぶ」ことも択善の中庸で、自己研鑽上大切な処世法です。

温故知新、学而思

「子曰わく、故きを温めて新しきを知る、以て師となるべし」(為政第二の十一)

「子曰わく、学んで思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆し」(為政第二の十五)

共によく知られた文章です。歴史は繰り返したり、過去の先達の成功や失敗経験は現在に通じるものがあります。そうしたよい先例を模範・亀鑑として学び、現在に置き換えてみる。そしてじっくり反芻消化した上で自分の頭で熟考・思索する。外部情報を沢山知っているだけでは罔(束縛される)自分の拙い頭脳だけでことを処理しようとすれば殆(危険)。「故いものと新しいもの」、その両端を執ってさらに高質なものに止揚し、「学ぶことと思うこと」、すなわち他者の知恵を貰って自分の皮袋で醸成していく。孰れも学問習熟や処世上に不可欠な中庸です。

さて子罕篇の首章に「先生は利益と運命と仁のことは殆ど語らなかった」とあり、公冶長篇に「子貢が言うには、先生が詩書礼楽などについて語るのは誰にも聞くことができるが、性や天道については聞くことができない、と」とあるように、孔子は人間の性(もちまえ)とか、仁とは何かとか、運命とはといった形而上学的議論は殆どしませんでした。現実派の孔子は理想を掲げながらも、如何に現在を生くべきかを追求していた哲人であるともいえます。

だからといって、孔子が人知を超えた存在である天について思いを馳せず、人間の性とは何だろうとか、昔から人は死ぬものと決まっている中での人生とは何か、などを考えなかったわけではありません。若い弟子が多かったことや、孔子自身が西洋哲学にみられる概念の抽象化・論理的思考をするより、現実的・具体的事象を通してものごとを発想するタイプの人間だったからだと思います。

孔子にとって一般論的な性や生死や運命などということはどうでもよかった。どうしたら人は仲睦まじく社会生活を送れるかに関心の総てがあったのです。ですから晉にいく途中で大河に阻まれて川上で慨嘆し、愛弟子の顔回が夭折した折や、ハンセン氏病に病む伯牛を見舞っては天命を呪ったり、そうかと思えば自分を周文化の伝道者だと天の使命を自覚したりしました。こういう時の孔子は政治家でも思想家でも教育家でもない、いわば詩人に近かった。

子、川の<sup>ほとり</sup>上に在りて曰わく、逝く者は<sup>ゆ</sup>斯くの如きか。昼夜を<sup>や</sup>舍めず。(子罕第九の十七)

子曰わく、天何をか言うや。四時行われ、百物生ず。天何をか言うや。(陽貨第十七の

十九)

かくして「知」「知る」知徳は、「人を知る」ことから、更にはよりよき処世法を知り、遂に人間や自然を支配する命（運命）を知ること発展してきました。

「論語」の最終章は「命を知らざれば、以て君子たること無きなり」(堯曰篇)で締めくられています。理想を掲げ、「徳治の世」を夢見ながらどの国にも受け入れられず、川上で慨嘆し、愛弟子たちの不幸を呪い、文明の伝道者を自覚しながら、「喪家の狗(犬)」「(史記)孔子世家)のごとく諸国を十四年間も流浪した孔子は「運命」をどう捉えていたのでしょうか。「論語」を丹念に読み、それに類する章を拾い上げて類推すると、「論語」に於ける「命」(広義の意味で運命)は、「主宰者としての天の命令」と「天の意思の自覚としての使命」という意味に大別できるようです。

#### < 主宰者としての天の命令 >

第一に、「命」とは、主宰者としての天の命令。それは、人間の力ではどうすることもできないものです。「憲問篇」に次の話が載っています。公伯寮という小人者が、孔子の弟子の子路のことを主人の季氏に讒言しました。それを聞いた子服景伯しふくけいはくという重臣が、そのことを孔子に告げて言うには、「このまま放置しておくとし路さんが危険です。私なら公伯寮を殺し、その屍を市場に晒すくらいの権力をもっていますが、どうなさいますか」と。それを聞いた孔子は敢然とこう言いました。

道の將に行われんとするや、命なり。道の廃せんとするや、命なり。公伯寮こうはくりょう、其れ命を如何。いかん(憲問第十四の三八)

すなわち、世の治乱興亡については、人間の意志などで決まるものではない。天が決めることなので、主人の季氏が子路を信用するか、讒言者の公伯寮を信ずるかは、天の意思次第である。公伯寮云々の問題ではない、ということです。ここでの孔子は、所謂「運命論者」です。ただ、この文章は毅然としていて、決して投げやりの響きはなく、あとで述べる「宿命論者」ではない。そこで、「運命」をさらに三つに分けて考えてみることにします。

#### 運命 人ならば誰しもが当然稟(う)ける事実

例えば、「死生命あり、富貴天にあり」(顔淵篇)とか、「古より皆な死あり、民は信なくんば立たず」(同)などがこの範疇に入ります。すなわち、人間なら誰しも必ず死ぬ、という事実。古から誰でもいつかは死んだという事実です。先述の憲問篇の、道の興廃は命だ、とする考えも、幾世代を通してそういう事実があった、しかもそれは子路、公伯寮そして

主人の季氏という三者の複雑な絡み合いによって最終的に決まる、という事実。したがってこの種の運命は、騒いでみたところでしょうがない、というか、そういう事実認識の上で結果を善処するしかあるまい、と考える、いわば淡々と容認すべき「命」です。

#### 偶命 たまたま出会う命

天の命は糾（あざな）える縄の如し。まさに「人間万事塞翁が馬」です。塞翁が大切にしていた馬がいなくなった。隣人は気の毒がったが、暫くすると胡<sup>えびす</sup>から野生の駿馬を連れ立って帰ってきた。息子が喜んで乗馬したが落馬して骨折。隣人がまた気の毒がったが、やがて戦争勃発、息子は怪我のお陰で徴兵を免れた。まさに人生の禍福は推量しがたい。「論語」にはこの遇命に当たる「命」を直接見出すことはできません。が、次章の孔子の言葉はそれを婉曲的に見通しています。

**子曰く、人の生くるは直（なお）し、これを罔（あざむ）きて生くるは、幸いにして免るるなり。（雍也第六の十九）**

（人が生きる意味は正直であることだ。それを欺いて生きて、うまくいっているように見えるのは、たまたま今、運良く天の鉄槌を免れているだけのこと。そのうち悪運が巡ってこないとも限らない、と）

#### 宿命 善人を襲う苦命

雍也篇に次の話があります。伯牛という徳行高い弟子が病にかかった。孔子が見舞いにいって愕然として言った。「これを亡ぼせり。命なるかな。この人にしてこの疾（病）あること、この人にしてこの疾（病）あること」と。これだけ徳を積んだ人格者なのに、こんなむごい病を。ああ、こんな善人を天が苦しめる。そんな絶望的な孔子の姿が目につかびます。顔淵の死んだ時も「ああ、天、予（我）を喪（亡）ぼせり。天、予（我）を喪（亡）ぼせり」（先進篇）と慟哭しました。さすがの孔子も人の子、宿命に憤り、天を怨んだようです。

#### < 天の意思の自覚としての使命 >

「命」には以上のような「主宰者としての天の命令に従う」という側面の他に、「使命感」という意味に近い「命」が「論語」に散見されます。例えば述而篇の次の文章がそうです。

**子曰く、天、徳を予（我）に生（な）せり。桓魋<sup>かんたい</sup>それ予を如何（述而第七の二十二）**

「史記」・孔子世家によれば、孔子が宋という国で迫害を受けたとき発した言葉です。弟子たちと大木の木陰で儀礼の練習をしていると、宋の重臣で桓魋という者が一行を殺そうとした。弟子たちは恐れ、早く立ち退こうと言ったのに対し、孔子は「天は私に徳を伝えるべく使命を与えたのだ。その私に桓魋ごときが何をできるものか」と応えたというのです。「子罕篇」にも似た事例があります。孔子が乱臣陽貨に似ていたために、匡国で土地の人々に取り囲まれたとき、「**周の文化の伝承者である私を天が亡ぼすわけがない**」(子罕篇)と言い切っています。

「**命を知らざれば、以て君子たること無きなり**」(堯曰篇)は結局こう解釈できるのではないのでしょうか。人間には運命というものがあって、生き死についてはどうすることもできない。また善からざる者が一時的に栄えたり、善人が不運にも残酷な事故にあったりすることも、人間世界では避けられない。にも関わらず、人間には一人ひとりの顔が異なるだけの天から与えられた使命・役割がある。人間とは、人生とはこうした事実のあることをしっかり認識し、自己関与できないことには腹を立てず、かつ諦めず対処し、自分の使命・役割を自覚して、へこたれずに生きていくことが大切だ。「人事を尽くして天命を俟つ」、それを知ることこそが君子が「命を知る」ことであり、人生を生き抜いていく上で一番重要な真実なのだ、と。

「**(先生が言われるには、私は)七十にして心の欲する所に従って、道をはずれないようになった**」(為政篇)。「命」を知り、知・仁・勇の天下の達徳を身に体した君子は、もはや惑わず、憂えず、懼れない。心は担<sup>たんとうとう</sup>蕩蕩として、なすべき自分の役割を果たした後は天に任せ、知者なら水を楽しむごとく動き、仁者なら山を楽しむごとく静かにそれぞれの性を生きる。人には天から賦与された天性とそれに見合ったそれぞれの仕事がある。「**百工には百工の仕事、君子には君子の仕事、百工は自分の職場でそれを完成し、君子は学問をすることによりその道を推し極める**」(子張篇)。

愛弟子の子路と顔回に囲まれてご機嫌のある日、彼らから孔子の現在の願望は何かと問われ、「**老人には安心され、朋友には信じられ、若者にはしたわりたい**」(雍也篇)と答えました。孔子にとって結局生きる意味や幸せとは、ただそんな凡事にあると知った、といったげに聞こえます。そして詩書を学び、徳を磨き、人を知り、命を知り波乱万丈の生涯の晩年に至った孔子は、自分の天性が学ぶことそのものにあることに帰結しました。「論語」の首章は「小論語」ともいわれる重要な章ですが、まさに孔子の人生哲学の帰結点を示す総括篇のように思えます。最後にそれを掲げて本書を閉めたいと思います。

子曰わく、学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。

朋あり、遠方より来る。亦た樂しからずや。

人知らずして慍みず。亦た君子ならずや。

(学而第一の一)